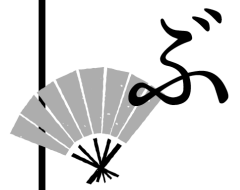


古典落語



に学



落語家

立川談四楼

第四十一回 みそ豆

昔

、大きな商家では味噌は買わずに造っていたそうです。自家製というやつですね。味噌造りはまず大豆を煮るところから始まります。

「定吉や、定吉」

「へーい、旦那さまお呼びでしょうか」

「今な、台所で豆を煮ているから、煮えたかどうか見てきておくれ」

「へーい。ああ、これは大きな鍋だ。蓋を取ってと。うわ、もの凄い湯気だ。でも見ただけでは煮えたかどうかわからないよね。しゃもじに取ってちょっとだけ味見をしてみよう。熱い。ふーふー。あ、これは美味しい。熱い。ふーふー。あ、これは止

まらない。こんなにあるんだ、お代わりしよう」

「こら、定吉。誰が食べると言った。私は豆が煮えたかどうか見てこいと言ったんだ。まったく、ろくなことをしやしない。向かいの三河屋さんへお使いに行っといで。行けばわかるようになっていいるから」

「へーい」

「それにしても定吉は美味そうにみそ豆を食べてたね。」

で

は私もこのしゃもじで味見を。熱い。ふーふー。うん、これは美味しい。熱い。ふーふー。これは止まらない。この味は酒のつまみによくっておまんまにも合うね。何にでも合うけど、定吉がそろそろ帰ってくるかもしれないな。あ、旦那

那も食べてる、と見つかったんじゃ小言が効かないからな。この器によそってと。

さ

てどこで食べよう。二階はしょっちゅう人がくるし、押し入れは暗いし、どこか一人になれるところはなかなか。どこか落ち着けるところはないか。そうだ、便所、はばかりがあるよ。あそこなら一人で満員だ。決めた、あそこで食べよう」

旦那が便所へ入ったところへ定吉が帰ってくる。

「ただいま戻りましたあ。あれ、旦那がないぞ。どこかへ出かけたかな。」

そうだ、この隙にみそ豆をもう少しただこう。美味いからね。まずはこの器によそってと。ここではまた見つかるかもしれないから、さてどこで食べよう。二階はしょっちゅう人がくるし、押し入れは暗いしなあ。

あ、便所、はばかりがあるよ。あそこなら一人になれるしね。うん、あそこで存分に食べよう」

定吉が便所の戸を開けると、そこにはみそ豆を食べている旦那の姿が。

「あ、旦那さま」

「定吉、何しにきた？」

「へい、みそ豆のお代わりを持って参りました」

これが『みそ豆』です。さすがは定吉、この嘸はなしでは見事な頓知とんちで危機を逃れます。

「お代わりを持って参りました」はいいオチであり、なかなかうまいセリフですよ。旦那が定吉の魂胆こんたんを見透かしたとしても、小言は言えませぬ。何しろ旦那もみそ豆を食べているのですから。みそ豆を食べたいという思いと、どこで食べるかという考えが一致。はい、個室には二人入れませぬからね。まあそんなところから笑いは生まれるのです。

定

吉も旦那も本当に美味そうにみそ豆を食べます。熱い。ふーふー。美味い。この豆を食べる仕草は前座と言えど芸の見せどころです。

師匠から何度もダメ出しが出て、本当に熱い豆を食べているように見えなければ、なかなかOKは出ません。このネタは「食べる仕草」という基礎たを叩き込まれる嘸はなしなのです。

みそ豆は私も子どもの頃に食べましたが、美味しさを覚えています。昔は惣菜屋そうざいでも売っていましたが、今は見かけませんね。強いて言えばスーパーに置いてある野菜豆でしょうか。あれの人参にんじんや蒟蒻こんじやくのない豆だけのものがみそ豆に近いですね。

定吉はまだ子どもで、この店の奉公人の一人です。店では旦那の権限が一番強いのですが、今回ばかりは定吉が見事に一本取りましたね。

※はばかり……便所、トイレの昔の言い方